

氏名(本籍)	江藤秀一(大分県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第2214号
学位授与年月日	平成18年5月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	ドクター・ジョンソンの『スコットランド西方諸島への旅』と18世紀のスコットランド

主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授	博士(文学)	加藤行夫
副査	筑波大学講師	博士(文学)	齋藤一
副査	筑波大学教授	博士(文学)	大熊榮
副査	筑波大学教授	文学博士	今井雅晴
副査	大阪大学教授		仙葉豊

論文の内容の要旨

本論文は、18世紀イギリスの文人、ドクター・サミュエル・ジョンソン (Dr Samuel Johnson) が、ジェイムズ・ボズウェル (James Boswell) を同伴し、1773年8月から約3ヶ月にわたりスコットランド西方諸島を旅したときの体験を記録した『スコットランド西方諸島への旅』(A Journey to the Western Islands of Scotland, 1775) (以下『旅』と略記) を詳細に分析し、訪れたスコットランドのハイランド地方やヘブリディーズ諸島の生活状況を、ジョンソンがどのように記録し、また、どのような所見をもったかを明らかにし、もってボズウェルの『ジョンソン伝』やジョンソンの他の著作物には見られないもうひとつのジョンソン像を追究したものである。

構成は、以下のとおり。

序章 ジョンソンの旅の目的と『スコットランド西方諸島への旅』の問題点

第1節 ジョンソンの旅の目的

第2節 『スコットランド西方諸島への旅』の出版と発行時の評判

第3節 現在の評価と問題点

第1章 1773年のジョンソンの旅の背景

第1節 氏族制の世界

第2節 18世紀スコットランドの道路状況と要塞

第3節 ジャコバイトの乱と2人の英雄 — ジョンソンの『旅』の解読のために

第2章 『スコットランド西方諸島への旅』の旅程とジョンソンの所見 (1)

— イギリス本土からスカイ島へいたるまで

第1節 エジンバラからアバディーンへの旅

第2節 アバディーンからインヴァネスへの旅

- 第3節 ハイランドの奥地を訪ねて
- 第3章 『スコットランド西方諸島への旅』の旅程とジョンソンの所見 (2)
 - ヘブリディーズ諸島から再び本土へ
 - 第1節 スカイ島の旅
 - 第2節 ラーセイ島の旅
 - 第3節 コル島の旅
 - 第4節 マル島からインヴァラリーへの旅
 - 第5節 インヴァラリーから再びエジンバラへの旅
- 第4章 『スコットランド西方諸島への旅』が語るもの
 - 第1節 スレイル夫人の手紙から — ジョンソンの本音と建前
 - 第2節 ジョンソンの植民地観とアメリカ嫌い
 - 第3節 ジョンソンの観察と所見
- 終章 ジョンソンの旅と18世紀スコットランドの変化
 - 第1節 ハイランド・クリアランス — 18世紀後半からのハイランド地方
 - 第2節 『旅』に見るジョンソン像

序章は、ジョンソンのこの旅の目的、『旅』の出版経緯と発行時の評判、さらに先行研究における評価と問題点を明らかにし、本論文の目的について述べている。

第1章第1節は、現在では完全に消滅したハイランド地方の氏族制を取り上げている。ジョンソンは、その氏族制が、まさに崩壊しつつあるときに当地を旅した。第2節は、ジョンソンが旅した頃の道路と要塞がどのような状況であったかを明らかにし、第3節は、ジョンソンがこの旅で面会したフローラ・マクドナルド (Flora Macdonald) とマルコム・マクラウド (Malcolm Macleod) を中心にジャコバイトの乱について論述している。フローラは、カロデンの戦いで敗北を喫してヘブリディーズ諸島を逃走するチャールズ王子を救った女性であり、マルコムは、ラーセイ島からスカイ島へ王子が逃走する際に行動を共にした人物である。ジョンソンが、ジャコバイトに対してどのような感情を抱いていたかを考える上で、2人は重要な人物であるとしている。

第2章は、ジョンソンの『旅』の前半部分となるエジンバラからヘブリディーズ諸島へ渡るまでを扱い、ボズウェルの書いた『ヘブリディーズ諸島への旅日記』を参照しながら、訪問地に対してジョンソンがいかなる所見をもったかを述べている。

第3章は、旅の後半に相当するヘブリディーズ諸島からエジンバラまでの旅がどのようなものであり、また、そこでジョンソンがどのような観察をし、それに対してどのような所見をもったかを明らかにしている。中でも、ヘブリディーズ諸島のスカイ島からコル島、アイオナ島を経てマル島に至るまでは、その旅程をボズウェルの『ヘブリディーズ諸島への旅日記』を参考にして究明し、その旅についてジョンソンがどのような所見をもつにいたったかを分析している。

第4章第1節は、スレイル夫人へ宛てた手紙がどのようなものであったか、その概要を明らかにし、それが『旅』にどのように反映されているかを究明している。第2節は、ジョンソンが『旅』で何度も取り上げている移民問題をもとに、彼がどのような植民地観をもっていたかを論じている。第3節は、以上の考察を踏まえ、『旅』におけるジョンソンの観察と所見をまとめている。

終章第1節は、ジョンソンが旅行をしたあとの18世紀末から19世紀初頭にかけて、ハイランド地方がどのように変貌したかについて述べ、彼が見聞した社会と文化が同地区からすっかり消滅し、今日見られる牧歌的なスコットランドの光景が出現しはじめた経緯を論じている。その原因は、ハイランド・クリアランス

であったが、それがどのような経緯をたどり、また、どのような状況であったかを明らかにしている。第2節は、この『旅』の詳細な分析によって浮上した作家ジョンソンの新たな面と、論者のジョンソン像における異同について論じ、もって本論文のまとめとしている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、18世紀イギリスを代表する旅行記、ドクター・ジョンソンの『旅』(1775)を丁寧に読み解きつつ、旅でジョンソンが体験したスコットランドの自然・風俗・制度などがいかなるものであったかを記述・分析し、あわせて彼の思想傾向や当時の時代思潮などを追究しようとしたものである。

従来のジョンソン研究では、随筆家ジョンソン、批評家ジョンソン、辞書編纂者ジョンソンが主として論じられてきた。しかし、本論文が研究対象とした『旅』は、十分に追究されてはこなかった。本論文は、いわば、旅行者ジョンソンを呈示する、世界で最初の本格的な試みである。しかも、ジョンソンの日頃の考えを実証することになる旅であったことを思えば、その実証の成果をまとめた『旅』はきわめて重要なものであることがわかる。ここに、本論文のすぐれた着眼点がある。

本論文は、総体的に言えば、単にジョンソンのスコットランド紀行をガイドブック的に扱うのではなく、同行したジェイムズ・ボズウェルの書いた『ヘブリディーズ諸島への旅日記』(1785)や、旅行中に友人スレイル夫人に宛てた書簡など、この旅行をめぐる書かれた他のテキストを参照・比較しながら、『旅』に見られる彼の観察や意見を重層的に記述している。この点は特筆に値し、ここにまず、本論文の成果がある。1745年のジャコバイトの反乱から約30年しかたっていない当時のスコットランドは、ジャコバイトの温床としての反政府的な雰囲気をもっており、スコットランド嫌いのジョンソンが、なぜスコットランド旅行をしたのか、これは従来大きな問題だった。本論文は、スコットランドに対するイングランド人ジョンソンの優越意識と、近年学者間で論争のおきたジョンソンのジャコバイト的側面とのアンビバレントで微妙な関係に光をあて、この問題に取り組んだことは、ふたつ目の成果である。

本論文は、また、氏族制などの民族的背景、道路事情などの地誌的な紹介、動植物などの博物学的な関心などについて十分手厚い記述をおこなっているが、なんといっても中心は次の5点であろう：(1)チャールズ・エドワードの逃走を女装をさせて助けたといわれる女傑フローラ・マクドナルドのエピソードとジャコバイトへのジョンソンの密やかな共感を論じた部分、(2)イギリス18世紀の「高貴なる未開人」および原始主義の概念とジョンソンのそれに対する嫌悪、(3)ジェイムズ・マクファーリンの『オシアン』への疑念と口承文学、(4)1790年代に盛んになるサブライムやピクチャレスクなどの美学的な概念への比較的早い関心、(5)アメリカへの移民問題など、当時の時代思潮とジョンソンのそれらへの反応が論じられている部分。

このように、本論文は、単に『旅』という紀行文の作品論にとどまらず、幅広く多様な視点を採用し、問題意識をもって議論を展開しているとともに、著者自らが、ジョンソンのスコットランド旅程を追体験することにより、フィールド・ワーク的なきめこまやかな叙述がなされており、これも本論文の分析に厚みを添えている。記述に繰り返しが散見されることや主観的な色彩が見えることなど、記述面で本論文に問題点がないわけではないが、18世紀後半の擬古典主義からロマン主義への思潮の変化を背景に、ジョンソンの『旅』という作品をこれほど精密かつ詳細に解き明かしたものは従来なかったことを思えば、とりたてて問題にするほどのものでもなく、本論文が関係領域に新知見を開いたことはまちがいない。

よって、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。